

むかし、あるところに、桶屋おけやがいて、山で竹を切っては、それで桶おけを作ってくらしていました。ある日のこと、桶屋は、いつものように山へ竹を切りにいきました。たき火のそばで桶を作っていると、山のおくから、やまんばがあらわれて、ものもいわずに火にあたりました。

桶屋は、心のなかで、

(やまんばが来たぞ。こいつはたいへんだ)と思いました。すると、やまんばが、

「おまえ、『やまんばが来たぞ。こいつはたいへんだ』と思っているな」といいました。桶屋は、(このやまんば、どうやってしまつしてやろうか)と思いました。するとやまんばが、

「おまえ、『このやまんば、どうやってしまつしてやろうか』と思っているな」といいました。桶屋はあわてました。

(こいつはたいへんだ。おれの思っていることがみなやまんばに分かるみたいだぞ)すると、やまんばが、

「おまえ、『こいつはたいへんだ。おれの思っていることがみな分かるみたいだぞ』と思っているな」といいました。

桶屋はこわくなって、だまって桶のたがを作りつづけました。

しばらくして、火にあぶっていた竹を持ちあげたひょうしに、竹がばちんとはじけて、やまんばのほうへとびました。

「あちちちち」

やまんばは、びっくりしてにげました。そして、

「人間ちゆうもんは、考えていないことまでやるもんだ。これだから人間はゆだんできない」といいながら、山おくへ帰っていきました。

それからは、やまんばは、めったに人には近よらなくなったということです。

おしまい。